

読書

放哉と山頭火

死を生きる

渡辺利夫著

(ちくま文庫・800円+税)



東京帝大法科卒という学歴を持ちながら、どうしても組織人として生きることができない尾崎放哉(1885~1926年)は酒に溺れ、人生の坂を転げ落ちる。結核という爆弾も抱えた彼は、人々の善意を蹂躪しながら傲慢に生きてゆく。一方、10歳のとき、井戸へ身を投げた母の死体を目にした種田山頭火(1882~1940年)は、早

大文学科に進むものの心を病んで酒浸りとなる。そして関

係する人々の親切を身悶えしながら踏みこける人生を歩む。現世の拘束の内側で生きることの困難なふたりは、ともに自由律句に救いを求め、

生き切るためには覚悟を

荻原井泉水が主宰する「層雲」の同人になる。

世間的には「ろくでなし」と呼ぶ以外にない生き方しかできなかったふたりの俳人の悲劇的な人生を、要所要所に作品を挟みながら、抑制のきいた筆致で描いてゆく。著者はアジア経済研究の碩学であり、拓殖大学総長を務める人物。だが、ここにある文章は

学者のものでも論壇人のものでもない。文人のものだ。あ

とがきに《私は放哉を生きている。山頭火を抱えもっている》と書くように、ふたりと同じように、拘束の多い現世を身悶えしながらも、なんとか踏みとどまって生きてきた渡辺利夫という生身の男が書いた文章と言えばよいだろう。ふたりが遺した作品に心をふるわせながらも、それに溺れない強さがある。

著者は書く。《現世への執着を断ち切り、深い孤独の中で死を選び取った男が尾崎放

評・桑原聡

(文化部編集委員)

哉である》《泡立つ暗闇の人生を送ってきた山頭火を救済に向かわせたのも、死であった》と。人として価値ある人生を生きるためには「死を生きる」覚悟を持つことが必要なのだ。執着や欲望まみれの無間地獄のような人生を生きたながら、その最終章でふたりは強靱な諦観を持つにいたる。放哉は《春の山のうしろから烟が出だした》、山頭火は《もりもりあがる雲へは歩む》という清澄な辞世の句を遺して逝く。

本書は「安全と安心」を求めて、家畜のような人生を生きようとする人々に向けた遺身の一筆でもある。